

国語

(六〇分) 答えはすべて解答用紙に書き入れること。

一 次の文章を読んで以下の問いに答えなさい。

たとえば、こんなのは、どうでしょう。

「文学において、最も大事なものは『心づくし』というものである。『心づくし』といっても君たちにはわからないかも知れぬ。しかし、『親切』といってしまえば、身もふたもない。心趣。心意気。心遣い。そう言ってもまだびつたりしない。つまり、『心づくし』なのである。作者のその『心づくし』が読者に通じたとき、文学の永遠性とか、あるいは文学のありがたさとか、うれしさとか、そういったようなものが始めて成立するのであると思う。」 (太宰治『如是我聞』)

文章の内容はとりあえず、どうでもいいです。気づいてほしいのは、この短い文章の中で繰り返される執拗なまでの「言い直し」です。

「そう言ってもまだびつたりしない」という「ことば」と「思い」のあいだの齟齬、乖離、埋めることのできない違和感。その乖離そのものが、この文章を先に進ませているということがわかるでしょうか？

「文学の永遠性」と書いてしまってから、その語のあまりの定型性におびえた太宰治は、すぐに「文学のありがたさとか、うれしさ」というふうに、簡単なことばに置き換えて、話をよりわかりにくくしてゆきます。

「文学の永遠性」ならわからないことはありません。でも「文学のありがたさとか、うれしさ」と言われても、困ります。そんなことばづかいで文学を語る人なんかいませんからね。

でも、「そういったようなものが始めて成立するのであると思う」というふうに結論めいたことを書けたのは「文学のありがたさとか、うれしさ」というよく意味のわからないことばを太宰が探り当てたからです。

よく意味のわからないことばを探り当てることができたので、とりあえず「言い直し」の運動を止めることができたんです。たとえば言えば、ちようどころあいの「安定のよくない石」をみつけたので、それを家の土台にあてがって、一仕事終えて休憩、という感じでしょうか。「安定のよい石」を見つけたから、仕事を一休みしたわけではありません。²ぐらぐらする石だからこそ、「ことば」と思いの違和感」を決して、^①カイシヨウすることができないような、落着きの悪いことばだからこそ、太宰はそれを文章の最後にあてがって、一区切りをつけたのです。

私が言いたいのは、文章を先へと進める力は、ことばが思いを満たさないという事実だ、ということです。

A この太宰治の文章は「自分の言いたいことを、きちんとことばにする」という国語的な査定をされた場合には、あまりよい評点をもらえないでしょう。でも、結局、書かれてから半世紀以上、³この文章が多くの人に読まれ続けてきたのは、これが言いたいことが言えないで、じたばたしている文章だからです。

「じたばた」している分だけ、ここには「誤解の幅」がたしかに確保されています。「理解」と「誤解」がぎりぎり漸近線的に接近しながら、けっして「一〇〇%の理解」が成就することがないように、そんなふう以太宰治は書いています。ここに作家の天才性は存すると言つてよいでしょう。

B 「何を言っているのか、よくわからないだけの文章」を書いて誰も読んではくれません。逆に「何を言っているのか、すらすらわかる文章」を書いても、誰も二度と読み返そうとは思いません。

わからないけれど、何か心に響く。「たしかに、そっだ」と腑に落ちるのだけれど、どこがどう腑に落ちたのかをはっきりとは言うことができない。だから、繰り返し読む。そういう文章が読者の中に強く深く浸透する文章なのです。

どうして、そういう文章が読者に強く、深く触れるかという点、そこに読者に対する信頼があるからです。信頼されている、^C 解釈を委ねられているという^(注5) 負託の感覚を読者が覚えるからです。

そういう文章は、読み手が主体的に踏み込んでゆかない限り、生気づいてこない。

「主体的な踏み込み」というのは、ことばを換えて言えば、読者の側の「錯覚」であり、「誤読」であり、ひどいときには「関係妄想」に類するものです。でも、それでいいんです。

太宰の文章の力は、読者に（こう言つてよければ）誤読する権利、誤解する自由を許していることに由来します。

国語

太宰は「心」とは書かずに「心づくし」と書き、「親切」、「心趣」、「心意気」、「心遣い」と言い換えてゆきます。

「心」は書き手である太宰自身のものです。私たち読者は、太宰のことを信じる他に、その胸中をサツする術がありません。

「心」は読者である私たちがいなくても、あるいは文章を書かなくても、太宰の中にあります(たぶん)。

でも、「心づくし」や「心遣い」は読み手あつてのものです。それは書き手が読み手に向かってまっすぐ差し出しているものだからです。読み手がなければ存在するはずがないものです。相手あつての「心づくし」「心遣い」ですからね。

「相手あつての」ということは、逆から言えば、サービスする側にどれほどの「心づくし」や「心遣い」があっても、それが相手には伝わらないリスクを含んでいるということです。

でも、すべては相手しだい、というこのところに、実は「心づくし」の「心づくし」たる所以があるのです。

私の思いをどう解釈するか、どう評価するか、それをあなたに委ねますという、いささか悲愴なダンネンを告げながら、それにもかかわらず、できたらこちらの意のあるところを汲んで、それなりのご評価を頂きたい……と、あれこれ言い換えたり、単語を組み替へたりしてみせる。この「あきらめのよさ」と「あきらめの悪さ」がなじみよく同居しているところが「心づくし」の手柄なんです。その語の真の意味において「よい文章」というのは、誤読する自由、誤解する権利を読み手に確保しておいてくれる文章の方なのです。

D、みなさんがここまでの話にうっかりうなずいてしまうと、話はさらに複雑になつてきます。

誤読を許容するというのは、言い換えると、「私はこの文章の意味がすみずみまで理解できた」という読者の傲慢が許容されないということです。誤読を許容する文章というのは、実は誤読しか許容しない文章なんです。

当然ですね？ もし、誰か(評論家とか文学研究者とかが)、「私はこの作家のこの文章の意味をすみずみまで理解できた」と主張して、その解釈が「正しい」ということに世間がゴウイしてしまつたら、それ以後の読者たちには「誤読する権利」がもうなくなつてしまいますから。だから、コミュニケーションにおいては、「一般解」というものが存在することが許されないので。

世に「古典」や「名作」として読み継がれている書物には膨大な解説書や研究書が献じられています。どうして、解説書や研究書がたくさん書かれるかというと、「読むとすぐくおもしろいんだけど、よくよく考えると、何が書いてあるのかよくわからない」からです。

古典といわれるほどの書物は、小説であれ哲学書であれ、読者に「すみからすみまで理解できた」と決して言わせないような謎めいたパッセージを含んでいます。これはもう必ずそうです。コウゾウ的にそうなんです。

「謎めいたパッセージ」というのは、必ずしも読んだ人がそろって「おおお、これは謎めている」と合意するようなものではありません。むしろ、ほとんどの人がすらすらと読み飛ばしてしまうような箇所、ふと足を止めて「ちよっと、待ってね。どうしてここで、こんなことばが出てくるの？ 変じゃない？……」というふうにいぶかしむ人が偶然発見するものです。

E、「一冊の書物に蔵されている可能性のある「謎」は原理的には無限ということ。一冊の本が蔵している「謎」は読者の数だけあります。

読者の数と言っても、読者ひとりで謎一個というわけではありません。同じ人が読んでも、子ども時代に読んだときと、大人になつてから読んだのでは、本の様相はまるで違つてきます。「ああ、この本は『こんなこと』が書いてある本だったのか、子どものときには気づかなかつたなあ」ということが、よくあります。子どものときには見落としていたことに大人になつてから気づくこともありますし、その逆だつてあります。失恋する前と後では違いますし、結婚したり、就職したり、子どもができたり、病気をしたり、親しい人が死んだり……といろいろな出来事が私たちには起こりますが、その前後では必ず同一の書物が読者に示す「謎」は変わってきます。

読者ひとりにおいてさえ、謎を発見する機会は、原理的には無限にあるわけです。

【語注】

(内田樹「先生はえらい」による)

(注1) 齟齬 …… くいちがうこと。

(注2) 乖離 …… 離れること。

(注3) 定型 …… きまつた形。

(注4) 漸近線 …… ここでは、両者が限りなく近づくが、接することのない線どうしのことを意味している。

国 語

- (注5) 負託 …… 他人に任せること。
(注6) 妄想 …… 根拠のない思い込み。
(注7) 一般解 …… ここでは、いかなる場合でも用いることができる答えのことを意味している。
(注8) パッセージ …… ここでは、短い語句のことを意味している。

問一 ―― 部①～⑤のカタカナを漢字に直しなさい。かい書で丁寧(ていねい)に書くこと。

問二 ―― A E に当てはまる語として最もふさわしいものをそれぞれ次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上用いてはいけません。

ア あるいは イ もちろん ウ つまり エ おそらく オ しかし

問三 ―― 部1「たとえば、こんなのは、どうでしょう」とありますが、筆者はこのあとの例を通じてどのようなことを言おうとしていますか。その説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 太宰治は、作者にしかわからない言葉をあえて用いる傾向(けいこう)があつたため誰(だれ)が読んでもよくわからないということ。
イ 太宰治の文章は、よくわからないが何か心に引つかかる表現が用いられていることに特徴(とくちょう)があるということ。
ウ 太宰治は、文学が滅(ほろ)びてしまうことにおびえていたからこそ、読者に文学のありがたさを伝えようとしたこと。
エ 太宰治の文章は、何を言っているのかよくわからないだけの文章だと現代では評価(ひやう)されるだろうということ。
オ 太宰治は、誰が読んでもよく分かるような文章を心がけていたので、多くの人に読まれ続けたということ。

問四 ―― 部2「ぐらぐらする石」とありますが、この比喩(ひよ)表現は、太宰治が用いたどの語句を喩(たと)えたのですか。その語句を本文中から十五字で抜き出しなさい。

問五 ―― 部3「この文章が多くの人に読まれ続けてきた」とありますが、それはなぜですか。その理由の説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 読者は「じたばた」せざるを得ないので、太宰治の文章を理解するのに時間がかかるが、それが文学の楽しさだから。
イ 読者にとって一見難しく思えるが、あれこれ考える中でようやく結論にたどり着くような作者の天才性を感じさせるから。
ウ 太宰治の文章には、読者が自由に解釈できる部分があるため、自ら進んで読み込むことで魅力(みりょく)を感じることができるから。
エ 誰が読んでもよくわかるように作者が心をつくした文章であつたため、文学の永遠性を読者に伝えることができたから。
オ 「腑(はら)に落ちる」感覚は人それぞれのものであるので、人によって異なる解釈が生まれ、それが活発な議論につながるから。

問六 ―― 部4「相手あつての『心づくし』『心遣い』です」とありますが、「太宰治」が文章を書く時にはどのようなことを心にかけていましたか。その内容を六十字以内で説明しなさい。

問七 ―― 部5「話はさらに複雑になってきます」とありますが、筆者がこのように言うのはなぜですか。その理由の説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。
ア 評論家や文学研究者の研究によって文章の解釈がなされて行くため、読者が誤読する権利はもはやなくなってしまふから。
イ 文章を誤読しないためにどうするべきかという問題を考えるためには、太宰治だけでなく古典まで考えねばならないから。
ウ 文章を理解する上で、自分一人では理解できない部分が必ずあり、解説書や研究書の助けを借りなければならぬから。
エ すぐれた文章というものは、誤読する自由を与えてくれる文章にはとどまらず、誤読しかせない文章のことであるから。
オ わけのわからない文章は誰も読まないが、逆に何を言っているのかすぐわかる文章も誰も二度と読み返してくれないから。

国語

問八 ―― 部6「謎」は原理的には無限ということですが、筆者がこうに言うのはなぜですか。「謎」の内容を説明しながら、その理由を八十字以内で説明しなさい。

問九 筆者の考えに合うものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「文学のありがたさ」は、誰が読んでもすらすわかるような文学作品の中にこそ隠されている。
- イ わかりやすい表現をあえてわかりにくい表現に変え、読者に努力を強いる点に太宰治の優れた才能がある。
- ウ 文学作品は読者の自由な解釈に委ねられているが、繰り返し読むことで作者の真意に気づくことができる。
- エ ある作家の文章の意味をすみずみまで理解できるのは、評論家などの一部の人間に限られる。
- オ 古典作品が今まで読み継がれている理由は、すべてを理解することができないからである。

国語

二 次の文章は梶井基次郎「矛盾の様な真実」(一九二三年発表)の全文です。これを読んで以下の問いに答えなさい。なお、出題に際して、一部表記を改めています。

「お前は弟達をちつともかわいがつてやらない。お前はアイのない男だ。」
父母は私によくそう云つて戒めた。

実際私は弟達に対して随分つつけんどんであつた。彼等を泣かすのはいつでも私であつた。彼等に手を振り上げるのは兄弟中で事実一人だつた。だから父母のその言葉は一応はもつともなのであるが私は私のとつていた態度以外にはどうしても彼等が扱えなかつた。

私はどちらかと云えば彼等には^②ボウクンであつた。しかしとにかく弟達はそれのある程度までには折れ合つて、私対弟等のある一定した関係の臍^{へそ}ろな輪廓^{りんかく}が出来ていた。

しかしその標準から私は時々はみ出たことをした。——と云うよりも事実いけないと思うようなことをした記憶をもっている。

三年ほど以前のことだと思ふ。その勘定だと、上の方の弟が十三で、その次が十の時だつた筈である。

その下の方の弟がこんなことを云つて戸外から帰つて来た。

「勇ちゃん——(上の方の弟の名)——今そとでよその奴に撲られたんだよ。」

訳をきいて見れば、勇が自転車につきあたられて、そしておまけに「この間抜け奴。」と云つてその乗っていた男に頭を撲られたと云うのである。

私はそれをきくとむらむらとした。年をきいて見ると四十ほどの男だと云う、私はその男を自転車からひきずり下して思い切りこらしめてやりたかつた。

私は、気が弱くて恐らくは抵抗出来なかつた弟が(a)口惜しく思っているだろうと思つた。そんな奴はどれだけこらしめてやつてもいいと思つた。そして私はいつのまにか、うんと顔を陰気にしてしまつていた。

しかし母はやはり年の^③コウだけのことを云つた。つまり勇にもいけない所があつたにちがいないと云う風なことを云い出した。

私はそれをもつともだとは思つたが、十三位の家の弟をよその大人が撲るといふようなことは(b)許せないと思つた。

「お母さん! そう云つてあなたはそれで堪忍出来るのですか。」と私は母に喰つてかかつたのを覚えてゐる。私は不愉快で不愉快で堪らなかつたのだつた。

そこへその本人が帰つて来た。顔を見ると悄けかえつてゐる。そして泣いたあとらしく頬がよごれてゐた。私はそのしよぼしよぼした姿を見ると可哀そうには思つたが、(c)不愉快が増した。

私が問うと弟は話し話しました涙をためた。——きいてゐる中にふと私はその話に少し嘘があるのを感じた。勝手のいい胡麻化しがあるように思つた。

その弟は常からよく勝手のいい嘘を云つた。²私はそれがいやで堪らなかつた。

——私はその気持には純粹に嘘を忌むという気持もあるにはあつたろうが、それよりもつと私に應えるのは弟に私の戯画を見せられることであつた。

包まず云うが、私自身はこれでかなりの嘘言家なのである。そして虚栄家の^④ソシツも充分持つてゐる。私は自分の卑しいところ、醜いところ、弱いところをかくすためによく嘘を云つた。

私は自分のこの性格が忌々しくてならないのである。

その思い出したくない急所に、弟の^⑤浅はかな嘘が強く触れる。そこを殊更に醜く拡大した私自身のボンチ絵を見せつけられるような侮辱を感じる。

私はその気持にはそれが私の肉親であるということも大分手伝つてゐるのだと思ふ。——つまりボンチ絵と云うよりも本当の私の姿だと思ふためではないかと思ふ。またもう一歩進めば——「勇さんは嘘つきだ。兄弟は争えない。あの直ぐ上の兄さん。」という風になつて、あまり明瞭ではなかつた私のその嫌な性格が、弟のそれではつきり世間の人にわかつてしまふという懸念が、あるいは働いてゐるのではなからうか。

やはりこれが肉親の故でもあるうし、永く一緒に暮して来た故でもあるうが、第一は性格の^⑥ソウジから、私には弟の嘘が、その顔つきや語調から、手にとるように——ちやうど私自身がその嘘を云つてゐるようにわかるように思えるのである。そして事實は十中八九その正鵠を証明してゐる。

国語

そんな訳で私は弟が物を云うとその話の途中で「それは嘘だ。」と云い切ったりすることがある。——こんな無礼なことは弟だからと云って許さるべきものではない。しかし私は不愉快のあまり憎悪さえ募らせて、意地悪くそれを云うのである。そして弟の話の腰を折ってしまう。

またあまり堪え切れなくなると、私はむらむらと前後を忘れて、「馬鹿! また嘘を云ってる。」などと呶鳴りつけずにはいられなくなる。——つまり私はその時、情ない気持で帰って来た弟にこれを浴せかけたのだった。

「またお前も意気地なしだ。それで黙っているってことがあるかい。何故一つでも撲り返さなかったのだ。」

私は弟の苦しい胡麻化しをその場合許せばよかったのだったが、その卑怯な嘘を感じると私は意地悪くなって、ついそんなぬことを云ってしまったのだった。一つはあまりの口惜しさから。

「……でも石を一つ投げてやった。……」

その時私は、その声の弱さに、また顔の頼りなさに、私の嫌な嫌な、真つ[X]な嘘の証拠を見たのだった。

私の先ほどから積っていた不愉快は、それに出喰わすと新たに例の不愉快を加えて一時には、ずんて来た。そして猛烈な口を求めた。私はこの圧力で爆発するように「馬鹿!!」をやってしまった。

私はこれを出すと、その時の弟が可哀そうで堪らなくなる。本当にそうだ。

弟はそんなことでも云って見なければ、(d)口惜しく、自分がみじめだったにちがいない。

私がその時それを信じてやれば幾分かは、彼の無残に傷けられた心も慰められたらろうのに。

私はその時の弟が可哀相でならない。

³ 悪いことをしたと思う。

* * *

私がその三年ほども以前のことを思い出したのは、今日往来で子供の喧嘩を見てからのことである。私はその喧嘩を見ていろんなことを思った。その思いの辿るまにまにふとその記憶にぶつかったのだった。

その喧嘩というのはこうである。

私は学校から熊野神社の方へ歩いてた。

雨模様の空の間から射し出す太陽がいやに蒸暑くてあの単調な路が殊更長く思えた。顔や首から油汗がねっとり滲み出ていたが、手拭を忘れて来ていたので、と云っても洋服の汚れた袖で拭くのはなおのこと気味がわるく、私はやけ気味に汗まみれであるいていた。昼過ぎだった。道は小学校の生徒が四五人と中学の生徒が二三人と、そして私だけだった。埃にまみれたポプラの葉が動こうともしない。

はじめ自分はそれをほかの事だと思っていた。——が、それが喧嘩だった。

一人の運動シャツを着た子供が小学校帰りらしい子供とつかみあっている。中学の生徒が二人ほど、あまり熱心でもなくそれを留めようとしている。

歩きながら見ていると、どうやら運動シャツの子供の方が優勢らしく見えた。片方の子供は(e)弱そうだった。

なんとか云ってシャツの児が相手の脛のあたりを蹴った。すると一人は横面を撲った。いかにもそれが頼りなさそうで撲ったとは云えない位のものだった。攻撃のためではなく自分の威厳のため止むを得ずその形をしている。——撲りながらも心では「もうこらえてくれ。」と云っている——という風に見えた。

一方は毒々しいほど積極的だった。弱い者いじめをしているにちがいがなかった。

瞬間私は、私が幼い時経験した無念さや恐怖を、やはりそんなに迫害されている私の姿を憶い浮べた。

さきの方は顔を紅潮させていて、それが変に歪んでいた。泣き出しそうにも見えた。しかし消極的にせよ一つ一つ報いていた。一つ一つ。私はそれがいじらしくて見ていられないような気がした。もうその上続けさせておきたくなかった。

とめてやろうと思って独りでに歩調を速めた時中学生等がやっと彼等をひき離れた。

国語

小学生の方は直ぐに、顔を少し伏せるようにして走り去った。——それも片足だけでけんけんをしつつ一種踊るような恰好を身体につけながら。

私はその瞬間そんな恰好をせずにいられないその児の気持が、私自身の気持のように、ぐんと胸へ来た。

「敗けて逃げるのんか。何や、泣いてやがる。」とそのシャツの児がその背後から叫んだ。

そしてそこに立って見ていた、その小学生の連れらしい、それもやはり学校帰りらしく鞆を下げた三三人が、独りで走り去った友達を追うともなく、その後からその方角へ歩いて行った。

——それは時間にすれば僅か二分かそこらのちよつとしたことだった。

しかし私にはそれがびんと響いた。

「男らしさ」への義理立てだけといった風に振り上げられたその児の弱々しい拳や、歪められた顔や、殊にけんけんで踊るようにした恰好が何度となく眼に浮んで来た。

その児がいじらしくて堪らなかった。

何だかその児の顔が私の一番末の弟に似ているようにも思えた。

「父親のない、母親だけが家に待っているという風の児なのじゃないか。」

そんなことまで空想したりした。

⁴そして蒸暑い天候のことなど忘れてしまっていた。

【語注】

- (注1) 戯画 …… 風刺画のこと。
 (注2) 嘘言家 …… 虚言家、うそつきのこと。
 (注3) 虚栄家 …… 強がって自分を良く見せようとする人のこと。
 (注4) ポンチ絵 …… 風刺画のこと。
 (注5) 正鵠 …… ここでは物事の核心をついているという意。

問一

——部①～⑤のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。(楷書で、ていねいに書くこと)

問二

~~~~部A～Cの語句の本文中の意味として最もふさわしいものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

## A 「堪忍」

- A 怒ること …… イ 悲しむこと …… ウ 仕返しすること …… エ 納得すること …… オ 許すこと

## B 「浅はかな嘘」

- A 悪意のある嘘 …… イ かわいらしい嘘 …… ウ 滑稽な嘘 …… エ 思慮の足りない嘘 …… オ 他人を陥れる嘘

## C 「つかぬこと」

- A 意地汚いこと …… イ 思いがけないこと …… ウ 根拠のないこと …… エ 残酷なこと …… オ つまらないこと

## 問三

( a ) ( e ) に入る語としてふさわしいものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上用いてはいけません。

- A あまりに …… イ いかにも …… ウ どうしても …… エ どんなに …… オ なおさら

## 問四

——部1「お前は弟達をちつともかわいがってやらない」とありますが、「私」と弟たちの関係について説明したものとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

A 父母から注意されることへの反抗心があり、「私」は弟たちに対する意地悪を止めることはできない。

イ 「私」は弟たちのことをかわいがることができず、いつも弟たちに攻撃的な態度で接してしまう。

ウ 「私」は弟たちに対して攻撃的に振る舞ってはいるが、弟たちもそれを受け入れている様子である。

エ 弟たちはいつも嘘をついて人をだますので「私」はそれを許せず、無意識的に手を上げてしまう。

オ 弟たちはすぐに泣きだす弱虫なので、「私」は弟たちを鍛えるために厳しい態度で接する必要がある。

国語

問五 ―― 部2「私はそれがいやで堪らなかった」とありますが、「私」が弟の嘘をいやがるのはなぜですか。その理由を七十字以内で説明しなさい。

問六 ☐には色を表す漢字一字が入ります。☒に入る漢字一字を答えなさい。

問七 ―― 部3「悪いことをしたと思う」とありますが、ここでの「悪いこと」とはどういうことですか。その内容を五十字以内で説明しなさい。

問八 ―― 部4「そして蒸暑い天候のことなど忘れてしまっていた」とありますが、このときの「私」の説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 思いがけず目撃した喧嘩はお互いが本気で攻撃をしている様子であり、喧嘩自体は良くないことだと思いつつも、その白熱した喧嘩の様子に見入って興奮している。

イ 思いがけず目撃した喧嘩の最中、小学生が自分の「男らしさ」などを守るために強がった振る舞いをしているのを見、それをきつかけとした考え事に夢中になっている。

ウ 思いがけず目撃した喧嘩で一方的に攻撃されている小学生の顔が自分の一番末の弟によく似ていたため、自分の弟がいじめられているのだと勘違いをしてうるたえている。

エ 思いがけず目撃した喧嘩の中で一方的にいじめられていた小学生があまりにもかわいそうだと感じ、どうにかしてその小学生を助ける手立てはないものかと考え込んでいる。

オ 思いがけず目撃した喧嘩は小学生と中学生によるもので、明らかに中学生による弱い者いじめであったが、すぐに止めに入ることもできず、その自らの弱さにうちひしがれている。

問九 本文の内容に合うものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「私」の弟は知らない男に自転車であつかられた上になぐられてしまったが、そのときに弟は石を投げつけるなど抵抗を試みて仕返しをした。

イ 弟が知らない男になぐられたことを知った「私」は、自分以外のだれかが弟に攻撃をしたことにいら立ちを覚え、男に痛い目を見せようと考えた。

ウ 弟は責め立てられるとつい嘘をついてしまうことがあるが、「私」も嘘をつく癖があり、周囲の人たちから嘘つきな兄弟としていやがられることがある。

エ 「私」はたまたま中学生と小学生との喧嘩を目撃していろいろなことを考えたが、その思考の最中にかつて行った弟に対する意地悪を思い出すこととなった。

オ 「私」が目撃した中学生と小学生との喧嘩では、小学生が負けん気を發揮して必死な抵抗を見せたものの、力の差もあって喧嘩に勝つことはできなかった。

※じるしの人には何も書かないこと。

